

# 19世紀女性社会改良家の瓜生岩子と フローレンス・ナイチンゲールの社会改良に対する 思想と行動の類似性から女性の社会進出の形を読み解く

河野弘美

## はじめに

本稿は、「19世紀女性社会改良家の瓜生岩子とフローレンス・ナイチンゲールの社会改良に対する思想と行動の類似性から女性の社会進出の形を読み解く」の研究を実施するための研究対象「瓜生岩子（1829-1897）」の人生に関する研究ノートである。フローレンス・ナイチンゲール（1820-1910）との類似性を見出すために、瓜生岩子という人物は一体どんな生涯を送り、岩子の研究はどのような視点で行われている傾向があるのかを入手可能な著書や研究論文及び資料をもとにまとめたものである。今後、研究論文へと発展させるために、必要な研究領域や資料、どのような視点を発展的におこなうことができるのか、瓜生岩子に関する課題点を見出すことが本稿の目的となる。

## 1. 瓜生岩子とはどんな人物なのか

瓜生岩子は、「日本のナイチンゲール」と呼ばれた女性社会改良家である。瓜生岩子は通称で、本名は瓜生岩である。尊称の意が込められた「子」が最後につけられ、瓜生岩子と呼ばれている。本稿でも尊称の意を込めて瓜生岩子を使用していく。岩子は、福島県の会津小田付村の油商を営む父と熱塩温泉で山形屋という旅館を営む家出身の母のもとで誕生している。経済的に困ることのない比較的裕福な家庭にそだつも、岩子9才の時に父が急死し、その後家が火事となり、母と兄弟ともに母の実家山形屋にもどり、そこから母方の瓜生の姓を名乗ることとなる。14才で親戚の家に家事手伝いの見習いとして住み込み修行を始めるが、その家の主人は蘭学の知識のある医師で、医師の叔父の元で裁縫、家事、看護についての知識と経験を得ていくことになる。17才で呉服屋の番頭佐瀬茂助と結婚し、呉服店を開業するも、夫は29才で病に倒れ、その後岩子は4人の子どもを育て

ながら経済的にも肉体的にも苦勞が絶えない大変な時期を過ごすことになる。献身的な夫への看護のかわりに夫は他界し、翌年母も亡くしてしまう。精神的支えのなくなった岩子は尼になることを決意するが、お寺の住職に人とために生きよと助言を受け、身寄りのない人、その日の食事に困るほど貧しい人に手をさしのべ、人のために生きる決意をする。<sup>1</sup>岩子が40才の時に戊辰戦争が起き、岩子は故郷の城下町で負傷した兵士たちを叔父のもとで得た知識と技能で看護し、63才の時に貧民や孤児を救済する目的で作られた東京市養育院（1872年創設）での幼童世話係長の職を依頼されその職につく。養育院で岩子は、深い愛情と慈愛の精神で笑顔のない幼児を「感化」<sup>2</sup>し、「はじめは大人に対して談話したり、笑ったりする児童は一人の他ないというくらいであったが、いずれの児童も誰に対しても話、且つ笑うというようになり、顔色なども初めとは大いに善くなったのである」<sup>3</sup>という業績を残している。人生の半分以上を社会福祉に捧げた岩子に、1896年女性として初めて藍綬褒章が授与されている。同章の受章者としては、女性第一号である。これほどの業績を残しているにもかかわらず、瓜生岩子の名とその功績は21世紀の現在広く知られているとはいえない。

## 2. 瓜生岩子の生きた時代と日本の社会福祉制度の関係について

瓜生岩子の生きた19世紀の日本は、江戸から明治に変遷した時代で、社会が激変した時である。江戸幕府（1603年～1868年）から新政府（1868年～1912年）へと国の政治体制が変わり、天皇を中心とした中央集権体制という近代国家に国が向かっていった時代である。多くの改革が行われていく中で、日本社会の男女の役割は従来通りであった。女性は家の中で家を切り盛りし家族の安住の空間を作り、男性は外で仕事に励み財をなし家族を養うというしきたりの社会である。女性が公の場である社会に出ていき活躍するということは容易でない時代であるが、瓜生岩子は強い信念と行動力をもって、生活困窮者や身寄りのないお年寄りや子供を救う活動を率先して行っていたのである。また、児童が将来的に自律し1人で生活できるように教育を施すシステムを作り、貧困者が利用出来る病院施設の確立にも奔走した功績を残している。

日本の貧困層救済の歴史をたどると瓜生岩子の郷里と関係が深いことがみえてくる。それは、江戸時代後期に松平定信（1759-1829）がおこなっ

た寛政の改革（1787-1793）の七分積金にさかのぼる。七分積金は明治時代に続く社会福祉制度の基礎といっても過言ではなく、災害や飢饉の災害時に必要となる米や財源の確保を行い、貧民救済に備えたシステムである。このシステムを運用するために地域ごとに町会所という事務所をもうけ「平時には、病気などによる貧窮者への米金の支給事業を行い、火災・震災・水災・コレラ流行・飢饉と言った非常時には、施米や施金などによる窮民救済にかなりの成果を挙げ」<sup>4</sup>ていた。寛政の改革の中心人物である松平定信は現在の福島県を含む旧陸奥国の白河藩主であり岩子と同郷ということになる。岩子は東京深川の貧民救済事業を視察にいくが、東京深川の地は、松平定信の墓石がある霊巖寺の所在する地域でもあり、江戸に在住していた白河藩や会津出身者たちのネットワークで福祉事業が支えられていたのではないかと推測が可能となる。この点は瓜生岩子と関連づけ今後の研究課題となる。ちなみに、松平定信がおこなった貧民救済を含む福祉システムに尊敬の念を込め、霊巖寺のある地域を定信の藩の拠点である白河の名にちなみ白河と名づけられている。<sup>5</sup>「日本の資本主義の父」と呼ばれる渋沢栄一（1840-1931）を、植村美洋は『渋沢栄一と松平定信』（2022年）で「日本の福祉事業の創立者」と命名しているが、渋沢栄一は松平定信の七分積金をもとに東京の貧民救済及び災害時の被害整備等をおこなっている。また、生活困窮者が多くいた東京府の第5代知事である大久保一翁（1818-1888）により1872年に貧民救済事業として養育院が設立され、渋沢栄一は後に院長をつとめ、ヨーロッパの慈善施設の見聞も広め、福祉とそれに伴う医療の発展に大きく寄与していく。養育院の運営をする上で、渋沢の右腕だった安達憲忠（1857-1930）を介して瓜生岩子を紹介され養育院で働いてもらう依頼をすることになったのであった<sup>6</sup>。渋沢栄一は、瓜生岩子の功績に敬意の意を込め、「岩子の面影を永久に残すため」と訴えた政治高官夫人の土方亀子夫人が発起人となった岩子の像建立プロジェクトの建設委員長となり、1901年に岩子の座像を完成させ東京の浅草寺公園内に設置している。養育院の設立精神は時代の移り変わりとともにその役割を変えていきながらも、東京都健康長寿医療センターに21世紀うけつがれている。<sup>7</sup>

瓜生岩子と日本の福祉制度の関係性を調べていくと、様々な要因が重なり合い岩子は、福祉という慈善事業へ足を踏み入れていくことになるが、その根底にあるものはなにかと問われると弱者救済の思想<sup>8</sup>であると考え

られる。「仁慈隠傷」の四字熟語は岩子の信条の1つであると伝えられており、その意味は「人には皆、他人の不幸を平気で見ているにはたえられない心がある」<sup>9</sup>というものである。この考えは松平定信や渋沢栄一そしてナイチンゲールにも通じるものである。岩子の思想と社会福祉の関係を理解するために弱者救済の思想に関する研究は今後取り込むべき視点であると考ええる。

### 3. 瓜生岩子の研究動向について

瓜生岩子の研究は3つの領域で進んでいるとあってよい。1つめは人生研究、2つめは渋沢栄一を中心とした社会福祉政策の一環としての政治領域での研究、3つめは児童教育における教育効果に関連した教育領域での研究である。一番大きな研究を占めているのは1の人生研究であり、岩子の生涯を歴史的事実にとり再現されているのが主流である。本稿では、入手できた資料をもとに、1の岩子の人生研究の動向と、ナイチンゲールとの比較研究をする上で有益な知識を把握していき、次なる研究ステップにつなげていくための課題点や発展性のある研究視点を見つけることを目的としていく。2と3については現在研究途中であるため、現段階で言及可能な情報は、1. 瓜生岩子とはどんな人物なのかと、2. 瓜生岩子の生きた時代と日本の社会福祉制度の関係についてに記載するにとどめている。なお、3については横畑の「瓜生岩子の生涯発達から考える保育のこころ」(2019)の研究ノートが参考になる研究であるが、この領域の研究は現段階ではすすめていないため本稿には含めないとする。

### 4. 瓜生岩子の人生研究

本稿で扱う瓜生岩子の伝記は時系列にそり次のものを使用する。『日本精神文化体系』(1935年)、『瓜生岩子伝聖女の像』(1943年)、『瓜生岩子刀自伝』(1994年)、『炎は消えず』(2013年)の4冊である。これらの著書を選んだ理由は、入手できたことに加え、時代の流れに沿った岩子の人生研究の発展を確認するためである。なお、『社会福祉活動に半生を捧げた』(2018年)は、フローレンス・ナイチンゲールとの比較研究をする際に有効であるため、人生研究には含めず今後の研究で扱っていく予定である。また、『大和なでしこ近世名媛傳』(1908年)にも瓜生岩子の人生が記載されているが、旧仮名遣いであり内容理解が難しく、正しい内容理解が現

時点できていないため本稿では取り扱わないとした。本パートでは、時系列にそり、各著書の特徴を述べていくことにする。

#### 4-1. 『日本精神文化体系』第九卷明治時代編下（1935年）

『日本精神文化体系』第九卷には、西郷隆盛、伊藤博文、新島襄など選り抜かれた明治時代の偉人が掲載されており、その偉人とともに瓜生岩子が「明治の女傑慈善の泰斗瓜生岩」として名を並べている。瓜生岩とはいったい誰か？の意味が込められた書き出しで、岩子の生い立ちが、瓜生家訓「自ら責めて人を責めず、自ら楽しむ所のは、先ず人をして楽しむ」<sup>10</sup>とともに紹介されている。この家訓は岩子の思想を特徴づけるものであり、衣服が乏しい人には衣服を、食料品がない人には食料品をおくり、戦いで負傷した人には看護をと、社会全体の幸福を願う行動に出ていると説明されており、貧民救済の土台となる岩子の内面的な性質である思想に着目して「瓜生岩子とはいったい誰か？」への紐解きがなされている内容になっている。同書では、岩子はナイチンゲールの業績に劣るわけではないと、岩子の功績は長く世に知られるべきであると主張しているのが特徴的である<sup>11</sup>。つまり、本書の目的の1つは、岩子の偉業のみならず家訓も提示し、岩子が生涯かけて行った、身寄りのない、また貧しさから食べるものに困っている人たちを助ける行為の礎になった現代の社会福祉制度につながる活動をした人物であると論ずる事である。国家の社会福祉制度という政治的な位置づけに瓜生岩子をし、政治の領域で研究する可能性を提示している内容となっている。

#### 4-2. 『瓜生岩子伝聖女の像』（1943年）

蒲原祐三による『瓜生岩子伝聖女の像』は、瓜生岩子が17才で佐瀬茂吉と結婚した後から65才で福島県に貧困者が無料で受診可能な済生病院を設立するまでの人生がまとめられた伝記となっている。同書は、戯曲のように会話で岩子の人生のおおくが構成されていて娯楽性の高い内容という印象をうけるが、瓜生岩子に関連した歴史的事実が入念に調査されており、正確な人生構築が試みられていることが理解できる。その事が解る部分は、岩子が夫死去後に恵まれない生活環境に身を置く人々に手を差し伸べる活動を東京でおこなうが、その場所の詳細についてである。『瓜生岩子伝聖女の像』では、「岩子が、東京深川の大塚十右衛門の経営している

救貧会所に五ヶ月の体験と研究を終へ、その文書を戦後疲弊の極に達していた会津若松に設置すべく勇躍帰郷したのは明治六年の春三月であった。」<sup>12</sup>と記載されている。この場所の情報は、『日本精神文化体系』に記載されている内容であるが、『瓜生岩子伝聖女の像』は物語調のような作り話の展開の印象があるが、先行研究の調査が適切に行われ内容が構築されている証となっているのである。台詞が多く使用されているため、本当にその台詞は語られたのか、という疑問はのこるが、岩子の人生を理解するうえで、娯楽性を背景に岩子を知ることが出来る内容となっており人生の先行研究書として大いに参考になる1冊である。

#### 4－3. 『瓜生岩子刀自伝』（1994年）

『瓜生岩子刀自伝』は「瓜生岩子精神」が広く深く普及することを祈う喜多方市長からの言葉が記載されているとおり、瓜生岩子の精神を伝承していくことが目的となっていると理解できる。先行伝記の内容同様、岩子に襲い掛かる近親者の死去と故郷での戦、その犠牲になる一般市民の様子が正確に語られており、加えて岩子の精神面に着目し、岩子が社会改良を実現するために精神的に強い女性へと導いた仏教の深い信仰について説明がなされている。岩子が福島長楽寺の一透道寄禪師から受ける訓の物語は、岩子逝去の折、長楽寺で埋葬がおこなわれたこととつながり、岩子の変わらぬ精神が一本でつなげられた伝記となっている。同書には他の伝記には書かれていない事項が含まれている。それは、瓜生岩子と野口英世（1876-1928）の関連性である。岩子が設立に関わった福島の貧困者の無料治療施設「済生病院」に野口英世が薬剤師としてかかわったことが記載されている。この情報は貴重な歴史的な事実であり、今後ナイチンゲールとの比較研究をする際にヒントとなる研究視点になる可能性があると考えられる。

#### 4－4. 『炎は消えず』（2013年）

4冊の中で最後に出版されている瓜生岩子の伝記は『炎は消えず』である。同書は、岩子の親戚にあたる瓜生悦子の従姉妹の廣木明美が、岩子の人生と関連のあった渋沢栄一などの遺族に取材し、岩子の人生を多角的な視点で構築する手腕がとられている。岩子に関連する救貧会所や幼学校、戊辰戦争（本書では「会津戦争」と表記）や磐梯山噴火、日清戦争などが

含まれている。それらの事実は岩子の弱者救済に関連づけられているため、岩子と日本の動きの関連性がわかりやすく説明されていて、岩子と福祉事業が理解しやすい内容となっている。同書の最も特徴的な点で他の瓜生岩子伝記に含まれていない事は、岩子から子へ、子から孫へ、孫からひ孫へと代々語り伝えられている岩子の人生が反映されている点である。よって同書は、瓜生岩子の人生を知るうえで中心となる伝記の位置付けとなる。既に発表されている岩子の伝記と内容が重複する点が多いが、岩子の人生が一家に語ら継がれていることをベースに構築されているということがわかる。参考文献には提示されていないが、親族が所有する私的な書簡やメモなど貴重な資料が岩子の偉業と人生そして人柄をより正確に再現していることがうかがえる。岩子と実家の熱塩温泉に存在する示現寺の住職との関係性や、交わされた会話などが岩子の思想を知るうえで大変貴重な資料にもなっている。岩子が戊辰戦争で負傷兵の救護をしていた際「いったい誰の許可をもらってやっておるのだ。名を名乗れ」と敵軍の隊長と思われる人物に問いただされ、「けが人の手当てにどこの藩も関係ございません。命に敵味方がございませうか。…」<sup>13</sup>と返事をした岩子の物語は他の伝記にも書かれているが、敵軍の隊長を後の総理大臣である黒田清隆であろうと親族間にしか伝わっていない事柄が根拠となり、定説を支持していることが伺われる。更に、戦場での医療従事を許可する許可証を岩子に与えていたことも明記されているが、その資料は現存しないあるいは見つかっていない。今まで岩子の人生で語られてこなかった事や視点が本書には含まれているのが特徴の1つである。岩子の福祉政策が後の明治政府により援助されていった経緯に、戊辰戦争の影響があったのではないかと想定することが可能となり、岩子側ではない、政府側特に、黒田清隆や岩子の人助けのうわさを耳にしていた板倉退助の研究にヒントが隠されている可能性が示唆され、今後の研究すべき点が明らかになっている。政府関係者に親しい知り合いが存在している、という点はナイチンゲールと類似する点である。更なる類似点は、医療の知識と訓練である。どの伝記にも記載されている、岩子が14才から結婚する17才まで岩子の叔母のもとに行儀見習いをした際、叔母の夫の会津藩御番医であった山内春瓏の傍で医学の知識と訓練を受けた経験である。廣木朋美によると、「叔父の書齋から、医学書なども借りて時間の許す限り読みあさった」<sup>14</sup>と記され、ナイチンゲールの独学ではあったが医学の知識を得て、フランスやドイツの病院施

設で訓練を重ねていた姿と類似するのである。本書は出版済の伝記をもとにした瓜生岩子を知るうえで一番多くの情報が含まれた内容であることは間違いない。今後の研究では、岩子の伝記は同書を中心にして発展させていく予定である。

## 5. 瓜生岩子とナイチンゲールの類似性

4冊の伝記を通して得た知識と、鈴木（2018年）の「瓜生岩子の生涯とフローレンス・ナイチンゲールの業績を表」<sup>15</sup>を参照すると、瓜生岩子とフローレンス・ナイチンゲールには叙勲の共通性がある事が解る。ナイチンゲールは没後に功績が称えられイギリスで女性初のメリット叙勲が授与されている。岩子は生きていた時代に叙勲を授与されている。また、ナイチンゲールと岩子は両者ともに看護という職を通して社会を変えようとした点で共通する。また、女性が職業に就き経済的な自律をする道筋を、ナイチンゲールは看護職を女性の職業とすることで、岩子は会津女子職業学校を設立し、女の子どもたちに裁縫や刺繍を教え、将来的に経済的に自律出来るよう教育施設を構築している<sup>16</sup>。2人に共通する慈悲の精神を紐解いていくと、宗教に影響を受けている事も共通していることが解る。ナイチンゲールは、英国国教会の神の存在を人生の重要な位置づけにしているが、そのきっかけは神からのお告げを生涯4回受けた経験からである。神が目指す理想の社会を実現するために、イエス・キリストを同士ととらえ人々がより幸せな世界を実現するために医療を通して活動をしていくことをしていったのである。また、岩子も仏教の教えに重きを置き、長楽寺の禅師以外に、母親の菩提寺である示現寺の住職の言葉に影響を受けている。1862年に夫、1863年に母を亡くした岩子は、生きる力を失い尼になる決意を住職に打ち明けた時、「全てを捧げ御仏に仕える心で、御仏の身代わりになって、悩める人、道に迷う人、貧しさに呻く者、病と闘っている人、そんな人々のために、お前の手を使うのだ。信心深いお前のことを御仏はどんな時にも助け、導いてくださるはずだ」<sup>17</sup>と言葉をもらい、岩子は社会の弱者に手をさしのべはじめたのである。そのことを決意した岩子が示現寺の住職に向かって発した言葉が次の通りである。「お仏様に代わって世の苦しみを背負っていこう。観音様やお地藏様の権化になろう。お仏様はそう思う自分にいつも力を与えてくれていた。これから、ますます御仏の心をお祈り求め、助けてもらいながら私の道を行こう。」<sup>18</sup>この岩子の



言葉は、ナイチンゲールが神のお告げを受けたのちに神の僕になり世界をより良い場所にするための役割を担った思想的展開と非常に類似しており、19世紀女性の社会進出と社会改良を目指す際の国境を越えた普遍性が見えてくる。既にナイチンゲールと岩子の類似性を述べている点については重複をさけるためにここには記述しないとするが、両者の類似点は複数存在している事が解ってきており、1つ1つの類似点について調べていくことで岩子やナイチンゲールの偉業を読み取る知識となることがわかっている。

## おわりに

「19世紀女性社会改良家の瓜生岩子とフローレンス・ナイチンゲールの社会改良に対する思想と行動の類似性から女性の社会進出の形を読み解く」を研究テーマに進めていくうえで、一番大きな課題である瓜生岩子の人生を理解すること、また、そのうえで、瓜生岩子の社会改良活動の根拠を支える思想について理解することへの糸口にたどり着くことが出来た。しかしまだまだ取り扱えていない研究書や論文また、解釈が十分に出来ていない視点などがあるため、引き続き人生研究は続けていく必要がある。人生研究を進めていきながら、岩子の思想を理解するために、今後、仏教の曹洞宗の教え、また、岩子の郷土の思想や伝統や文化への理解を深め、岩子が残した古着の布を再生利用した草履作りや着物づくりに宿る精神等への研究も岩子の精神を理解するうえで必要であることがわかってきた。この気づきは現時点での研究の宝となっている。最終的な研究目標は、フローレンス・ナイチンゲールと比較し、瓜生岩子とフローレンス・ナイチンゲールがどのように女性の社会進出を可能にし、現代社会や国際社会にどのような影響を残しているのかを読み取るである。また、瓜生岩子の価値を再発見することである。すべき課題は沢山ある事を理解しながら、瓜生岩子の偉大さを人生研究を通して知れたことは今後の研究の励みになっている。

## 謝辞

「19世紀女性社会改良家の瓜生岩子とフローレンス・ナイチンゲールの社会改良に対する思想と行動の類似性から女性の社会進出の形を読み解く」の研究を進めるにあたり、瓜生岩子に関する資料収集に多くの方にご

協力を賜った、東京都健康長寿医療センター養育院・渋沢記念コーナーの稲松考思先生、喜多方市ふるさと振興（株）喜多方蔵の里の荒川慎太郎さんに深くお礼を申し上げます。

## 注

- 1 瓜生岩子刀影会、『瓜生岩子刀自伝』（改訂版）、（福島：瓜生岩子刀自影会、1994年）、4-5頁。
- 2 内藤二郎、『社会福祉の先駆者 安達憲忠』、（東京：（株）彩流社、1993年）、110頁。
- 3 内藤二郎、110頁。
- 4 西山松之助他編、『江戸学事典』、（東京：榊弘文堂、1984年）、215頁。
- 5 「松平定信とその時代② 松平定信登場」『資料館ノート』、江東区深川江戸資料館、第98号、2013年、1頁。  
植村美洋、『渋沢栄一と松平定信』、（東京：現代書館、2022年）、179-184頁。
- 6 内奥二郎、91-128頁。
- 7 植村美洋、195-196頁。
- 8 植村美洋、98頁。
- 9 若林平太、「福祉を作った女性たち 菩薩の化身 瓜生岩 ②」、『福井新聞』、2013年3月25日号。
- 10 藤澤親雄他編、『日本精神文化大系』第九巻 明治時代編下、（東京：金星堂、1934年）、333頁。
- 11 藤澤親雄他編、330-331頁。
- 12 蒲原拓三、『瓜生岩子伝聖女の像』、（東京：共同印刷（株））、191頁。  
注：同書では旧漢字が使用されているが本庶では現代漢字を使用している。
- 13 廣木朋美、『炎は消えず』、（東京：榊文芸社、2013年）、85-86頁。
- 14 廣木朋美、38頁。
- 15 鈴木妙、「社会福祉活動に半生を捧げた瓜生岩子」、『埼玉医科大学短期大学』、第29巻、2018年、17-19頁。
- 16 瓜生岩子刀影会、12頁。
- 17 廣木朋美、58頁。
- 18 廣木朋美、111頁。